こころの玉手箱

文化人類学者
須藤　健一

4

足元の大切さ 京都で痛感

鏡餅を模した酒器

京都の伏見に15年住んだ。20を超す蔵元がひしめく、全国有数の酒所だ。娘の幼稚園の友人一家と、家族ぐるみで付き合った。ウナギの寝床といわれる、間口は狭いが奥行きが深い京風の家によくお邪魔した。彼女の祖父が、某酒造会社のいわば番頭さんだった。

毎年末、酒造会社として得意先などに配るお歳暮の、銘酒の入ったいろいろな酒器をいただいた。この三方付き鏡餅は、上のお飾り一式と三方を除き、鏡餅の部分だけ陶製の容器になっている。この「鏡餅」を毎年棚にかざり、正月気分を十分に味わうのだ。

京都暮らしの思い出が詰まっている

戦災を逃れた京都は、古い習俗がよく残っている。夏の終わりの地蔵盆や秋の御香宮のお祭りはその好例で、興味深く体験した。

地蔵盆は8月の後半、お地蔵さんを中心にした、子供らの成長と安全を願う催しだ。辻々にあるお地蔵さんをきれいに飾りつけ、お供えをする。町内ごとに子どもが集まり、福引や数珠回しに興じる。数珠回しは、子どもが車座になって巨大な数珠をみんな両手でつかんで回していく遊びだ。

「これは『とうどやさん』と同じだ」。私の中にひらめくものがあった。

故郷の新潟県佐渡島に伝わるとうどやさんは、青竹の柱と稲わらでこしらえた小屋に、子どもたちが集まって遊ぶ行事である。お菓子を食べ、ゲームをする。また、歌をうたいながら家々を訪ねてお金をもらう。それで文房具を買って分け合った。

最後の日、小屋に火をつけて、高く上がる炎で正月飾りや飾り袋、書き初めを焼いた。残り火で餅を焼いて食べるのが楽しみ。これは、ひと月遅れの小正月の催しであった。

季節こそ夏と冬、行事もお盆とお正月と正反対だが、いずれも子どもらの成長と連帯を見守る祭りだ。地蔵盆ととうどやさんは、地域ではぐくみ継承してきた子ども文化といえよう。

異文化研究といえば海外ばかりに関心が向きがちな私に、足元を見つめる大切さを痛感させた京都暮らし。この酒器にはそのころの思い出が詰まっている。